今　日　の　統　計

農林省茨城統計調査事務所　海老沢　滋

統計――社会の片隅の仕事、或いは蔭の下の力持的存在である。これが一般の認識ではなかろうか。統計調査にたずさわる者は、少なくともこのような考えは持たぬとしても……。

個人の身辺をかえりみても、統計的生活要素が無数にとりまいている。一つ生活費のこと、一つ教育費、或いは家業の収支、etc……。企業では経営診断、生産、販売の計画など、行政機関においては、行政効果の測定、社会経済の発展にともなう新政策の策定等等。好むと好まざるとにかかわらず、統計を基盤にして経営なり行政が行なわれている。

果たして統計が行政或いは経営と表裏一体の関係になつているだろうか。石器時代ならばいざ知らず、現今激動する社会経済の下に、統計調査なくして、手さぐり的無計画に等しい経営、施策が行なわれれば、やがて社会のヒヅミが生じ経営の行詰りは必定であろう。

ここで統計とは何んぞや、と設問をしてみると、私は斯く答えたい。統計といえば数学を連想する。そして多くの人が数学のように難かしいものであり、とっつきにくいものであると受けとつている。

確かに現代統計には数学応用が多く、統計学の本を開いても難解な方程式がぎつしり出てくる。しかし数学に出てくる数字と、統計に出てくる数字では大へんない違がある。

例えば、水産統計の例をあげると、今まで或る規模の漁船の年間漁獲量が100トン程度の漁獲をあげていた。それが最近80トン位しか漁獲されなくなつた。他の同規模の漁船は50トン平均しか獲れなかつたが、漁労技術の改善を行つた結果、年間80トン台に達した。

この場合、数学的には同じ80トンでも統計的には全く異質なものである。引例が長くなつたが、統計は単なる数字のら列ではなく、もろもろの統計項目から共通要素を定め、系列的に集計し、その動向を読み、分析するものである。いわゆるスポット写真ではなく連続フイルムなのである。

時宜に適した統計と正確な調査があれば統計ほど適確な表現力をもつものはない。「それは文豪も及ばない強い訴求力をもつている」と或る人は言つた。

形は10種類の数字の組合せに過ぎない。しかし、特定な表章項目をアレンジすることにより芸術品にまさるものになる。

昔、占領時代に、かの吉田首相が食糧政策のことでマッカーサーと接衝した際、日本の統計の杜撰さを指摘された。そこですかさず吉田さんは「統計があれば戦争には負けなかつた」と言い放つたというエピソードを聞いている。これこそ統計の重要さを言い得て妙である。

日本の官公庁なり、民間企業の中には「彼は体が弱いから、消極的だから統計係でもやらしておけ」的な考え方は最近少なくなつて来たとは思う。しかし未だこのような風潮はなお残つているのではなかろうか。

今日のようにオートメーションが採用され、技術革新が進み大量生産、大量販売が要求されている時代では、もはや一時の思いつき、山勘的な場当りの政策や、経営方式は許されない。

長期計画を樹立する場合、また新製品の開発のための市場調査にも統計が利用され、この統計の実証によつて、第三者に強い説得力をもたせる。

最近官公庁や企業の構造改善事業、体質改善、科学的管理が強調されている。いずれもこれらの青写真は統計的要素が基盤になつている。どんな名企画でも、その内容に統計という骨格もなく、調査という肉付きもなければ、それは砂上の楼閣というべきではなかろうか。